

放課後子ども教室に関わる大人たち
——我孫子市立第一小学校の学童保育保護者・教室サポーターを
対象とした調査報告——

北原靖子*・柴田恵江**・蓮見元子***
川嶋健太郎****・浅井義弘*****

A Research of Adults who relate to After School Activities
in the Elementary School;
Parents' and Supporters' Opinions

Yasuko KITAHARA, Yoshie SHIBATA, Motoko HASUMI,
Kentaro KAWASHIMA, Yoshihiro ASAI

要 旨

千葉県我孫子市立第一小学校にて展開されている放課後子ども教室「あびっ子クラブ」は、児童保護者や地域サポーターなど多くの大人たちの支えを得て成り立っている。十全な放課後子ども教室活動を保証するためには、彼ら子どもと関わる大人たちの声に耳を傾けることも重要であろう。そこで、このたびあびっ子をよく利用する学童保育児童の保護者とあびっ子クラブ活動を支える地域住民ボランティアを対象として、質問紙と面接の二種の調査を実施した。

その結果、学童保育児童の保護者たちは子どもたちの安全や規律の保証に切実な希望を寄せていること、また、あびっ子についてある程度把握しているが、活動から何を期待できるかの共通認識には乏しいことが示唆された。また、ボランティアで見守りや特別活動を行っている地域サポーターたちは、共通して自分の余暇活動に対して成熟した見通しを備えた方々だが、ことに見守りは個人として積極的な意味づけが見出しにくいいため、人材確保が課題となるであろうと予想された。子どもに加え関係者各立場の声を汲み取り、共存共栄に向けての在り方を多面的に検討する必要性が示唆された。

キーワード：放課後子ども教室、成人調査、保護者、ボランティア、やりがい

*准教授 発達心理学

**川村学園女子大学大学院人文科学研究科

***教授 発達臨床心理学

****助手 学習心理学

*****教授 臨床心理学

1. はじめに

平成18年度より開始した放課後子どもプランを受けて、千葉県我孫子市では、翌19年6月から我孫子市立第一小学校をモデル校として放課後子ども教室「あびっ子クラブ（以下あびっ子）」を立ち上げ、既存の「学童保育室（以下学童）」と連携しつつ活動を展開している。本稿執筆時の平成20年10月時点では、我孫子市子ども放課後検討委員会を通して今後の運営体制への協議が進み、その中では来年度以降から学童と一体化運営として他小学校にもあびっ子を展開する道が模索されている。

子どもの放課後の「安全で健やかな活動」を支援するために、筆者たちはかねてからあびっ子活動を現場が適宜点検評価してゆくことの必要性を訴え、ことに直接当事者である子ども自身の考えや意見を聴きとることを重視して、その調査手立てを構築する試みを行ってきた（北原他2008、川嶋他2008、蓮見他2008）。しかしながら、放課後子ども教室は、子どもと現場を直接仕切るスタッフだけで成り立つわけではない。あびっ子に出かける子どもの背後には、彼らの参加を認めたり勧めたりする保護者の存在がある。またあびっ子の背後には、平常活動の見守りや特別活動「チャレンジタイム」の提供^(注1)など、各種サポートを行う地域住民ボランティアの存在がある。現場が成り立つ上ではこうした成人たちの協力が不可欠であり、したがって彼ら自身の考えや意見を汲み取ってゆくこともきわめて重要である。

そこで筆者たちはこのたび我孫子市教育委員会・我孫子市子ども福祉部・我孫子市第一小学校ならびに第一小学校学童保育・あびっ子のご協力を得て、学童保育児童保護者とあびっ子サポーターを対象に「大人の声を聞く」二種の調査を行った。本稿ではその調査結果を報告すると共に、放課後子ども教室が地域の中で機能するための課題について考察した。

2. 学童保護者の声調査

目的

学童は、両親就労など諸般の家庭事情により「保育に欠ける」児童を対象として設置され（厚生労働省、2007）、我孫子市立第一小学校の場合は校内に専用の建物とスタッフが配備されている。全校児童の一割強が在籍しており、一年生を筆頭に低学年が多いが、高学年や障害等で特別な配慮を要する児童もいる。同じ校内で放課後を過ごす学童児童は、学童自由時間にあびっ子を利用しやすい「キー・ユーザー」である^(注2)。学童の子どもたちが新たな放課後活動の場をどうとらえているかの把握に続き、今回は、我孫子市教育委員会・学童保育父母の会と

連携して第一小学童の保護者を対象とした質問紙調査を実施し、保護者が子どもの放課後活動に寄せる希望や、子どものあびっ子利用に対する感想・意見を把握することを目的とした。

方法

調査対象：第一小学校学童保育在籍児童 60 名の保護者を対象とした。

質問紙：学校評価支援システム（SQS）シートを利用し、以下からなる質問紙を作成した。

1. 学童児童の学年構成と一週間の学童保育室利用実態（選択式回答）
2. 学童からの主な帰宅方法と帰宅時間（選択式回答）
3. 学童に行かせる理由（12 項目各々につき当てはまる程度を 5 件法で選択・その他の理由があれば自由記述で回答）
4. 学童に行かない時の理由（複数選択・その他の理由があれば自由記述）と、子どもが学童に行きたがる（または行きたがらない）ときの事情（自由記述）
5. 学童で実現できていること（10 項目各々につき当てはまる程度を 5 件法で回答）
6. 子どもが放課後を過ごす上で必要と思うこと（5 の「実現度」と同一項目、同一回答形式）
7. あびっ子クラブに対する知識と、子どものあびっ子利用度合い（選択式回答）
8. あびっ子クラブに対する保護者の感想・意見（自由記述）

手続き：平成 20 年 6 月に、児童一名に 1 部として学童保育室経由で保護者にアンケートを配布し、37 部を回収した（回収率 60.2%）。配布回収は我孫子市教育委員会が実施し、筆者たちは統計処理ソフト SPSS（Ver.15）を使用して分析を担当した。

結果と考察

子どもやサポーターと共通な質問についての結果は別稿（蓮見他，2009）と後段に回し、本稿本節では、保護者が現在わが子を学童に行かせている諸事情（質問 1～4）と、あびっ子に対する意見を伺った部分（質問 6～8）について、自由記述を中心に紹介する。

まず学童の利用状況については、一年生 12 名をトップに各学年に複数が在籍しており、全体の 2/3 は平日毎日のように学童保育室に通っていた。学童を退出する主な方法や時間は学年によって異なっており、保護者のお迎えに頼る一年生は、六時以降の退室が中心であった。

学童に行かせる理由としては、「仕事で家に帰る時間が遅いから」「危険な目にあう可能性が低いから」が「よく当てはまる」を 5 とする五段階評定の平均 4.5 以上であった。学童に行かせる理由（その他）の自由記述全 9 中、「子どもが学童が好きだから」と子どもの意思を挙げたものは、6 年生の保護者 1 に留まった。一方、学童を休むときの理由（複数選択）としては、

「家に保護者などがある」「発熱・病気がある」が全72中52と7割を占めた。また休む理由として「子どもが今日は行かないというから」の選択は72中の4に過ぎなかった。これらの結果から、学童は、家庭の事情を受けて保護者が子どもを「通わせている」場であることが再確認された。またその際、保護者は学童に対して、自分たちが不在の間に子どもが寂しく危険なことに会わないよう期待しているのが伺えた。

一方、これまでの学童に加えて新たに開設されて一年を経たあびっ子については、保護者は子どもが「行ったことはある(15名)」「時々行っている(17名)」ことは把握していたが、37中11名と3割があびっ子について「あまり知らない」「知らない」と回答した。現場に向いて活動を観察する機会に乏しい保護者は、とりあえずわが子から話を聞きつつ、「ぜひ行きたいというなら行けばよい」と子どもに任せているようであった。そのためか、自主的に放課後の過ごし方を考えるのはまだ難しい1年生では、「よく行く・時々行っている(3名)」よりも「行ったことはある(8名)」程度の利用となっていた。

あびっ子に対する感想・意見欄に寄せられた16の自由記述からは、保護者は学童とは異なるあびっ子の特徴として、遊具や場所(「(あびっ子では)剣玉ができる」「(あびっ子ができて)遊び場が増えて嬉しそう」)、特別な体験(「(チャレンジタイムで)物を作ってきた」「ショートテニスが出られず残念」)、運営の違い(「(学童なら)いつも同じ先生がいる」「入退管理を子ども任せにしないで」「時間を延長してほしい」)などを把握しているのが伺えた。しかし、ふだんの活動内容については、子どもも自分も「学童との違いがよくわからない」とするコメントが複数存在していた(表1)。これらの結果から、保護者はあびっ子の個別的具体的な実体はつかんでいるが、あびっ子が日々子どもに提供できる「体験」とは何かについての共通認識は必ずしも固まっていないことが示唆された。

あびっ子への感想・意見の中で子ども同士が主体的に行う関わりに着目したコメントは、「学童外の友だちと遊べて楽しいようだ」とした1に留まった。しかし、子どもが学童に行きたがったり渋ったりする事情(質問4)の自由記述回答欄には37中27と多くの記入があり、その内容からは、子どもにとって友だちはとても重要だと保護者が把握しているのが伺えた^(注3)。また学童に行かせる理由(その他)としても、「集団生活を学んでほしい」「友だちと仲良くなる」などの記述が複数あり、保護者にとっても子どもが仲間関係を通して社会性を身につけることは大切とされている様子であった。学童について尋ねた中ではこのように「友だち関係」の話題が多く出たにも関わらず、あびっ子に対する感想・意見からはあまり見えてこない。保護者は直接現場を見聞きする機会が少なく、家庭に届くあびっ子の便りではチャレンジタイムなど「大人にしてもらえる」目立つ事柄に目が向きやすいのかもしれない。それらを

放課後子ども教室に関わる大人たち

表1 あびっ子に対する学童保護者の感想・意見

学年	自由記述
一年生	<p>1 ○時間をもう少し延長して欲しい</p> <p>2 ●まだ1年生だからか、あびっ子に行っても学童と変わらないことをしているような感じ です。親も含め、どのようなことをして過ごす場なのかよく分かりません。そのせいか最近 はあびっ子に行かなくなってしまいました。</p> <p>3 ●ほとんど行っていないようです。子どもに聞くと「つまんない」と返ってきました。</p> <p>4 ○私は(親は)あまり知らなかったが、子どもが今日はあびっ子へ行って○○したよと言っ て作った物を見せてくれたことがあった。なので子どもへの提案はされていて、子どもに も分かりやすい(行きやすい)方法で参加できるのだなと思ったことがありました。これ からもよろしくをお願いします。</p> <p>5 ○学童に行かせなくても、安心して子どもの遊び場として利用でき、助かっているご家庭 が結構あると思うので、とてもよいと思います。設立するまで大変なのでしょうが、それ でも各小学校にあると大変ありがたいと思う方が沢山いるのではないのでしょうか。</p>
小計	5
二年生	<p>1 ●入室退室の管理は子ども任せになり過ぎないようにキチンと把握していただけると助かり ます。タグをつけたまま帰宅したこともあります。特にクラブから連絡がありません でした。あくまでも「自己責任」で、入退室管理は単なる目安かもしれませんが・・・学 童とあびっ子のどちらの管理になるかの切り分けが曖昧なことで、万が一の事故があった 場合、責任のたらい回しになるのは親として困ります。(学童の開室時間中(退室前の時間 という意味)はあびっ子にいても学童の責任の範疇??)</p> <p>2 ○ショートテニスをやりたがっていたが、習い事の日のため参加させてやれなかったのが 残念でした。どうしても曜日が固定されてしまう事情も、とてもよくわかりますが違う曜 日なら体験させてやれたのに…と思うと少し残念です。</p> <p>3 ○学童の存在とリンクする部分が多いと思う。両方ある必要性があまり感じられない。あ びっ子の範囲を拡大して統合の方向性が妥当ではないかと思う。</p> <p>4 ○学童以外の友達とも遊べるようなので、楽しみみたいです。</p>
小計	4
三年生	<p>1 ○剣玉やパズルを楽しんでいるようです。お手玉があると良いと子どもが言っています。</p> <p>2 ○夏も冬も5時までやって欲しい</p> <p>3 ●学童を利用している子どももいつも同じ先生が居る学童のほうが良いと言っています。</p>
小計	3
四年生	<p>1 ○あびっ子があり、学童で遊ぶだけでなく遊ぶ場所が増えたので楽しそうです。続けて欲 しいと思います。</p>
小計	1
五年生	<p>1 ●楽しみが見つけられない様子。学童のほうがよいとのことでした。</p> <p>2 ○高学年の男の子の利用が少ないと聞いています。ボーイスカウトでする紐結び等、野外 活動的な教室を開催してみたら良いと思う。</p>
小計	2
六年生	<p>1 ○子どもの意見は、学童とあびっ子クラブはちがうから両方欲しい。です。母親の意見は、 6年生になりましたので、子どもを守るところは必ずしもいらなくなりました。子どもの 居場所という点で、慣れた学童があることを幸せに思います。30数年前、YMCAに所属 した楽しかった体験を思い出します。サポーターが、大学生くらいの若い人だと、活発に 活動ができると思います。親、先生、学童、あびっ子みな中年では、元気な子どもたちは 力を持って余してしまうように思います。</p>
小計	1
総計	16

○：肯定的計 11 ●：疑問視計 5

ふまえると、あびっ子が「自分が選んで友だちとのびのび関わる体験」の場であることについては、もっとアピールされてよいと思われた。決まった仲間と時間割で動く学童より自由度が高いあびっ子での友だち関係は、より創造的であると同時に、より葛藤的でもありうる。遊びを通してコンフリクトに出会いつつ、それを乗り越える関わりスキルを発達させる機会に恵まれていよう（荻野，1997）。しかし自由な場であればこそ、成長を期待する一方で、いじめなど問題行動が生起しないよう十分に配慮する必要もあるだろう。澤田（2005）は小中学校生を対象に妬みに関する質問紙調査を行い、小学校段階ではことに男子が優れた能力をもつ相手に敵対感情を抱きやすいと報告している。メリットとリスク双方に関する的確な認識が共有されれば、子どもたちの成長を保証するために大人が（何を「してくれるか」ではなく）何を「すべきか」という観点から、今後に向けて建設的な議論が期待できると思われる。

3. あびっ子サポーターの声調査

目的

第一小学校あびっ子には、専属スタッフ3名の他に、地域ボランティア十余名が「あびっ子サポーター」として登録している。サポーター活動には、当日の各活動場所をスケジュールに従って巡回し子どもたちの様子を見る「見守り」と、子どもたちに特別な体験機会を提供する「チャレンジ」の二種がある。あびっ子の活動場所は中心の2教室以外に図書室・校庭・体育館など分散しており、日々の安全を保証する上でも子どもたちがうまく関わりあえるようさりげなく働きかける上でも、見守りサポーターの存在は不可欠である（袖山，2008）。また現在あびっ子の目玉ともなっている琴・習字・ショートテニスなどの「チャレンジタイム」では、主にその活動に通じたチャレンジサポーターが講師を勤めている。見守りには時間・体力・配慮、チャレンジには専門技術・指導力が求められ、どちらも現在のボランティア数では十分とはいえない。特に見守りサポーターの充足は課題であり、手配ができないため活動場所を制限せざるをえない日もあるという。

それでは、現在あびっ子でサポーター活動を行っている大人たちは、どのようなきっかけで参加し、あびっ子の何にやりがいを見出しているのだろうか。本調査ではあびっ子サポーターのご協力を得て、自分の余暇活動への意識や個性に関する質問紙と併せて面接を実施し、あびっ子でのサポート活動から得られる各々の精神的報酬（こころの満足や充足）について検討した。

方法

調査対象：第一小学校あびっ子サポーター 13 名

質問紙：余暇活動に関する個人の意識の高さを、関心性・自律性・計画性の観点から把握する「成人キャリア成熟尺度」(坂柳, 1999) と、交流分析に依拠して個人の心的エネルギーを批判的親 (CP)・養育的親 (NP)・大人 (A)・自由な子 (FC)・従順な子 (AC) のプロフィールとしてとらえる「P - EG」(中村・松岡, 2006) の、二種を用意した。

面接での質問：第一小学校校内で一室をお借りし、一時間程度の時間をかけて半構造化面接を行い、以下について尋ねた。面接の一通りは、許可を得て IC レコーダーに録音した。

1. 基本確認 (年代, サポーターとしての活動内容等)
2. あびっ子に参加したきっかけ
3. 子どもの放課後活動に大切なものは何だと思うか (学童保護者への質問 6 と同様に評定)
4. あびっ子は子どもに何を提供できていると思うか (学童保護者への質問 5 と同様に評定)
5. あびっ子にどのようなやりがいを感じているか
6. あびっ子に対する感想・意見

手続き：サポーター会議で蓮見・北原より調査趣旨に関する説明を行い、協力に同意して下さった方に対し、平成 20 年 7 月から 9 月に柴田が予約・面談を行った^(注4)。面談の終了後に返信用封筒と共に質問紙を渡し、記入後郵送をお願いした。協力に対しては薄謝を支払った。

結果と考察

「子どもの放課後を過ごす上で必要と思う程度」と「それらが現場 (学童保護者は学童, サポーターはあびっ子) で実現できていると思う程度」について前節の学童保護者 37 名とあびっ子サポーター 13 名の回答を比較すると、友だち関係については、どちらも「とても必要だ」を 5 とする五段階評定で平均 4.5 以上と重視されていたが、学童では「②異クラス異学年の友だちと出会える」、あびっ子では「①仲の良い友だちと遊べる」と、その場で実現される友だち関係が若干異なるのが伺えた。また「③大人に勉強や遊びを教えてもらえる」「⑦新しい体験が学べる」「⑧楽しい体験ができる」「⑩戸外で体を動かせる」などの体験学習面については、それなり必要だが学童では不足がちとされたのに対し、あびっ子ではよく充たされ、放課後子ども「教室」と呼ぶにふさわしい役割を果たしている様子だった。さらに、保護者が学童では明らかに不足とした「⑤よい本が読める」「⑨広い部屋で遊べる」についても、図書館・体育館等の学校設備を利用できるあびっ子なら過不足なく実現できているとされた (表 2)。

全体的に学童保育者の学童評定よりあびっ子サポーターのあびっ子評定値は高く、回答者の

表2 学童とあびっ子で実現できていると思うことについての大人の評価

項目	学童 (学童保護者評定)	あびっ子 (サポーター評定)
①仲の良い友だちと遊べる	4.7 - 4.1 = + .6 △	4.5 - 4.3 = + .2 ○
②異クラス異学年の友だちと出会える	4.6 - 4.3 = + .3 ○	4.9 - 4.3 = + .6 △
③大人に勉強や遊びを教えてもらえる	4.0 - 3.2 = + .8 △	4.3 - 4.5 = - .2 ○
④マイペースで過ごせる	3.7 - 3.4 = + .3 ○	3.6 - 4.2 = - .7 ◎
⑤よい本が読める	4.0 - 2.8 = + 1.2 ×	4.7 - 4.6 = + .1 ○
⑥マンガやゲームができる	2.9 - 3.5 = - .6 ◎	3.8 - 4.5 = - .7 ◎
⑦新しい体験を学べる	4.2 - 3.3 = + .9 △	4.8 - 4.6 = + .2 ○
⑧楽しい体験ができる	4.2 - 3.6 = + .6 △	4.7 - 4.6 = + .1 ○
⑨広い部屋で遊べる	4.3 - 2.7 = + 1.6 ×	4.0 - 4.7 = - .7 ◎
⑩戸外で体を動かせる	4.9 - 4.1 = + .8 △	4.7 - 4.7 = ± .0 ○

引算の左の数値：子どもが放課後を過ごす上で必要と思う程度平均評定
(5を「とても必要だ」とする五段階評定)

引算の右の数値：現在の場で実現できていると思う程度平均評定
(5を「よくできている」とする五段階評定)

×：必要度が実現度より平均にして1以上高く、その場には不十分だとされた項目

△：必要度が実現度より平均にして.5以上高く、その場に不足がちとされた項目

○：必要度と実現度の平均格差が±.5未満で、その場に過不足ないとされた項目

◎：必要度が実現度より平均にして.5以上低く、その場にはもう十分だとされた項目

立場の違いも影響していそうなので解釈は慎重にすべきだが、以上の結果は、あびっ子が「全校生徒に開かれた場」「友だちとのびのび遊べる場」であると共に、「体験学習ができる場」であるという期待を裏切らないものだったといえよう。

あびっ子サポーター13名は、男性2女性11、年齢は50代以上が11と、壮年女性が多数であった。担当活動種類は、見守り4、チャレンジ7、両方が2であった。2名は知人からの紹介だったが、他は市の広報を見て応募するなど、自分から探し動いてサポーターになっていた。

紹介か応募かに関わらず、成人キャリア成熟尺度におけるサポーターの回答は、関心性（「自分のこれからの余暇生活（自由時間）には大変関心をもっている」等10項目）・自律性（「余暇生活（自由時間）の過ごし方には自分で責任をもつ」等10項目）・計画性（「これからの余暇（自由時間）の使い方について自分なりの見通しをもっている」等10項目）の全てにおいて、5を「よく当てはまる」とする五段階評定平均で最低者でも3を超え、全員の平均は関心性4.2（標準偏差.5）・自律性4.1（.5）・計画性3.9（.6）と、どの観点もバランス良く高い値であった。このことから、あびっ子サポーターはもともと自分のこれからの生き方について熟した考えを

もっていること、逆にいえば、このような方々がどこでも潤沢に存在すると期待するのは安易であろうことが伺えた。またP-EGのパターンはバラエティに富み、批判的親（CP）優位者が皆無なのは予想通りだったが、いわゆる「世話好き」の養育的親（NP）優位者も13名中1名に留まっており、単純に子ども大好きな性分なのでサポーターを引き受けたわけではないだろうことが示唆された。また参加のきっかけについての語りからは、最近の子どもたちをめぐる社会情報に危機感を抱き、地域づくりに貢献したい思いがあったことが伺えた。

活動の中で得ているやりがいについての語りによれば、チャレンジ担当は、これまで培ってきた自分の得意分野を活かしているため、金銭的には割に合わずとも活動自体から自然に精神的充足を見出している様子だった。また、これまでの豊かな経験と照らし合わせて、「（高齢者と違って）反応がある」「（塾と違って）生徒さんも必ず来てくれる」等、活動からあびっ子ならではの得られる手ごたえも感じていた。それに対して見守り担当は、「（今の）時代の子どもの成長を見てゆける」「私を認めてくれる」「私が行けばわが子も来て、ここで遊ぶと家庭とは違う」など、自分自身にとっての意義をしっかりと把握できていればこそ、地味な活動を継続できていると感じられた（表3）。以上をふまえると、何か特別な体験学習ができるという「健やかな育ちへの期待」基準にのっとったチャレンジと、日々友だちとのびのび遊べるという「安全な育ちの保証」基準にのっとった見守りでは、サポート活動から得られるものになりに落差があるであろうと示唆された。したがって、自分にとっての直接の見返りがアピールしにくい見守りサポーターを、今後もチャレンジと同じように一般募集で確保してゆくのは難しいと予測された。

また、どちらの担当の中からも、あびっ子の実現度評定を求めたとき、「自分は他の活動を知らないのわからない」と述べる声があった。現在でもサポーター会議が定期的に用意されて情報意見交換はなされているようだが、実際に双方を担当していないかぎり、自分の活動をこなすだけで手一杯かもしれない。子どもの問題行動（汚いことば、乱暴、ルール違反）への対応法なども、まだこれから構築してゆく段階である。桂木（2006）は、非専門家が支援活動に関わってゆく上では、彼らが活動の中で困難を感じたことに助言する機会を設けること、現場内のボランティア同士やボランティア・スタッフ間に良好な人間関係を築いておくこと、活動に喜びを感じ意欲を向上させる手立てを検討することが重要だと述べている。現在の我孫子市では学童児童指導員に対して研修や巡回指導相談体制があり、対人援助に関わる「燃え尽き」（土井、1988）を防ぐ手立てがなされているが、あびっ子ボランティアには及んでいない。それをふまえると、これからのあびっ子は、サポーター自身のサポート体制についても一層の充実が求められるだろう。本調査の結果から、今後各小学校で放課後子ども教室を開くにあたっ

表3 あびっ子サポーターの語り

人と担当	やりがい
<p>Aさん (チャレンジ)</p>	<p>—今、じゃあ、あびっこでのやりがいというか、どうですかね？ そうですね。(中略) 反応がある。パッとその場で反応があるじゃないですか。だから、この本選んで良かったとか、この本紹介してあげて良かったんだなっていうのがわかるんですよね。だから、お子さんと接して、すぐ反応が返ってくるっていうのは、良かったなあっていうのはありますよね。やって良かったって。 —読書普及と新しい本の紹介（を目指している）？ なるべくお勉強に使えるものとか。今回も、夏休みに自由研究があるので、その参考になればよいものを紹介してあげた。 —勉強の一環ではない？ そこまではいかない？ 私が、教師時代にできなかったことが、ちょっとでもお手伝いして、読書の幅が広がってくれたらなって思っている。</p>
<p>Bさん (チャレンジ)</p>	<p>—お琴とかって、まず学校とかでは体験できないですよね。 珍しいと思われる方が多いみたいですね。(中略) でも、わたくしサイドから言わせていただくと、これはこれで良いかなって思うんです。というのは、場所も提供していただける。それで、生徒さんも必ず来てくれるから。(中略) 別にお金とかそんなのは目的にしない場合ですよ。それはそれで、自分の張り合いにつながるなと思いますね。そういう意味では、(中略) よくセットされていますと思います。 —張り合い？ 張り合いがありますね。やっぱり進歩していきますからね。頑張る人は。 —では、教えるのが楽しかったり？ そうですね。やっぱり、成長するのを見るのは楽しいですね。 —結構、Bさんも練習とか、教え方とか、楽譜とか工夫されているんですか？ 自分の勉強になりますね。わけのわからない人に、どういう風に説明したらわかりやすいかな、自分はわかっているけど、それを相手にわからせるために、どういう説明をつけたらわかりやすいかなって。(中略) 経験を通してね。 —触れる機会ないですからね。 自分ではすごく難しいと思っていたお子さんでも、あれって案外「夕焼けこやけ」でも弾けたなんていうとね、嬉しそうな表情をするじゃないですか。それがこちらの励みになりますよね。</p>
<p>Cさん (見守り)</p>	<p>—Cさんが見守りされていて、先ほど「良かったな」「うれしい」ってことだったんですけど、他に特にありますか？ 見守りってすごく難しい立場なのかなって、私なんかは思っていて…。(中略) 時代で、子どもさんの成長の仕方が違っているのが、それを見ていけるのがこういう機会だから。(中略) 自分で、今の子はって反発するばかりじゃなくて、逆に置き換えてね。悪いことしているときに、うちの子もあんなことしているのかなって。(中略) ごめんなさい。言いかたおかしいわ。わたしは、見守る人もいなくちゃ。チャレンジの先生ばかりでは、先生の手助けになる人がいませんもんね。私は、先生の少しでもお手伝いになればって気持ちです。ので、たいして役には立ってないですけど、いるってだけですけど。</p>
<p>Dさん (見守り)</p>	<p>—子どもは好きだったんですか？ 興味があって来られたんですか？ 小学生の時、いいこともあったし、やなことあって、いろいろな経験をしてきたから、いい意味で、子どもに伝えたい。 —なるほど。いい経験もあるし、大変なこともあるけど、それを含めて醍醐味を子どもに伝えていきたいなってことですか？</p>

Dさん(続)
(見守り) あと、私、折り紙とか絵とかを私個人的に最近少しずつ、遊びながら勉強しているんです。子どもと一緒に。できるようになるといいなって。
一見守りをされている中で、Dさん自身のやりがいはありますか？
 駅を歩いていたたり、スーパーであったりすると声掛けてくれる。

Eさん
(見守り) **一eくん(自分の子)が来る時と来ない時でやりくりが…？**
 私が「行くよ」って言うのと絶対あの子も来るので。ここで私と遊ぶのもいいみたいです。好きみたいです。ここだと私もほかの用事がないから、集中できますけど、家でやると「お母さん一回だけ」とか「今忙しいからできない」とか結局同じトランプやるのもウノやるのも、家でやると私は限られた時間しかないっていうか、できたりできなかったり。ここだったら、他にやることはないっていうか。
一Eさん自身にとって、家とはまた(異なり)、子どもとメインで遊べるっていうところになっている。
 そうですね。わが子と対してもまた違いますからね。

太字：面接者の発話

では、地域からどうやってサポーター（特に見守り）を確保できるか、またそのサポート力が十分に発揮できるようどう盛り立ててゆくかが重要な課題となることが、改めて浮き彫りになったといえよう。

3. 総合考察

地域の中である場が機能するためには、まずは、その場を作る意義に対する共通認識と賛同が必要である。その点、学童だけでなくあびっ子のように全校児童に開かれた「安全で健やかな場」があると望ましいという設立趣旨に反対する者は少ないであろう。

しかし、総論賛成の次には、より具体的に、その場に何を期待すべきかについて確認する必要がある。今回の二種の調査から、我孫子市第一小学校のあびっ子は、一部児童の放課後生活を支えてきた従来の学童とは異なって、全校生徒を対象に「友だちとのびのび遊べる」「体験学習ができる」場として機能していることが示唆された。こうした具体的なレベルでありようを確認し賛同を得てゆくことも、今後に向けて必要不可欠なステップであろう。

さらに、新たな場を拓くとあれば、利益と共に相応のコストとリスクを伴う。それらは、場の恩恵を受けるであろう子どもの声を聴くだけでは容易に見えないが、無視することはあり得ない重要な側面である。本調査から、学童保育保護者はあびっ子ができることで得られる利益について一応理解しているが、一方で、これまで保ってきた安全面や生活の規律が脅かされないか不安を感じていることが示唆された。また無償の自発性を旨とするボランティアであっても、手ごたえが得られるといったように何がしか「採算が合うこと」が大切なことが示唆さ

れた。その場が十全に機能するには、「そのために作ってもらった」子どもからはもちろん、場を維持し盛り立てる大人たちからも、「作っただけのことがある」と評価される必要がある。子どもといっても一年生と高学年を一緒に語れないのと同じく、大人といっても保護者とサポーターでは立場が違い、当然「採算」の具体的なありようが異なる。本調査をふまえると、特にサポーター活動は平均的な地域住民にとっては持ち出し過剰になる可能性が高く、その確保は重要な課題となると思われる。今後は、コスト・リスクを含め関係各位の声も聞きとった上で、場全体としての帳尻が合う方策を検討することが求められよう。

注

- (1) 平成19年6月開所から20年3月一杯の間、あびっ子の活動日は225日であり、そのうちチャレンジタイムの開催は86日であった。チャレンジタイムの活動内容は、室内ではカレンダー作り、習字、琴などで、主に基本教室となる「メインルーム」の隣教室「2の部屋」で行われた。室外ではボール競技など、主として体育館で行われた。収容スペースやスタッフ数に限界があるため、チャレンジタイム1回あたりの延べ参加人数は10～20名であり、収容に余裕がある室外の平均参加数は室内より多かった。
- (2) 平成19年度のあびっ子における一日あたりの平均参加人数は36.2名（一般児童29.3名、学童児6.9名）であった。実数としてみれば学童児は学童外（一般）児の1/4程度だったが、参加率としては通算平均9.6%と、学童外児の通算平均参加率5.3%の2倍近くであった。彼らは宿題やおやつなど要所では学童生活を維持しつつ、自由時間には所定の手続きを行って同一校内のあびっ子に向向き、学童以外の友だちと体育館で遊んだりチャレンジタイムに参加したりすることが可能であった。
- (3) 子どもが学童に行きたがる（または行きたがらない）事情として「仲間関係」を挙げたものは27中18に達した。具体的な例としては、「友だちがいるので（行きたがる）／一緒に遊ぶ友だちがいない時（は行きたがらない）」「学童に行っていない友だちの家に遊びにいきたいとき（は行きたがらない）」「年下の面倒を見るのに疲れたとき、上級生から嫌なことを言われた・されたとき（は行きたがらない）」等であり、同学年の友だちの存在は促進的、異学年の存在はしばしば抑制的に働いている様子だった。
- (4) 本調査の面接を担当した柴田は、あびっ子開設当時から見守りサポーターを担当してきた。またサポーター面接においては、本稿で紹介したやりがいについての聞き取りの後、柴田自身の研究テーマに従って、あびっ子の中で「気になる子」についての声把握を行った。そちらの結果については、以下を参照されたい。

柴田恵江 2009 気になる子に対する意識化の過程 川村学園女子大学人文科学研究科修士論文 執筆中

引用・参考文献

- 土井健郎, 1988, 「燃えつき症候群—医師・看護婦・教師のメンタルヘルス—」, 金剛出版.
- 蓮見元子・北原靖子・川嶋健太郎・浅井義弘, 2008, 「タッチパネルアンケート」, 日本教育心理学会第50回総会発表, PF1-06.
- 蓮見元子・北原靖子・川嶋健太郎・浅井義弘, 2009, 「放課後子ども教室について児童の声を聴く—タッチパネル式パソコンを使って—」, 『川村学園女子大学紀要』, 20, 1, pp.141-157.
- 桂木彩, 2006, 「非専門家の電話相談ボランティアに関する探索的面接調査—非専門家性・困難・対処法・求めるサポートについて」, 『九州大学心理学研究』, 7, pp.169-174.
- 川嶋健太郎・蓮見元子・北原靖子・浅井義弘, 2008, 「放課後子ども教室利用についてのタッチパネル式アンケート—学童保育室児童の声を聴く—」, 日本心理学会第72回大会発表論文集, 1228.
- 北原靖子・蓮見元子・川嶋健太郎・浅井義弘, 2008, 「新規放課後活動に対する小学児童の満足度調査—子ども自身による「放課後子ども教室」評価の支援—」, 『川村学園女子大学紀要』, 19, 1, pp.85-104.
- 久保裕也, 2008, SQS <http://sqs-xml.sourceforge.jp/>
- 文部科学省・厚生労働省放課後子どもプラン連携推進室, 2007, 放課後子どもプラン—未来の大人たちのために, 今できること <http://www.houkago-plan.go.jp/>
- 仲村延江・松岡洋一, 2006, P-EG (Projective EGOGRAM) 使用手引 (株)千葉テストセンター
- 荻野美佐子, 1997, 「コミュニケーションの発達」, 井上健治・久保ゆり (編), 『子どもの社会的発達』, 東京大学出版会, 10, pp.185-204.
- 坂柳恒夫, 2001, 「成人キャリア成熟尺度」, 吉田富士雄 (編), 『心理測定尺度集第Ⅱ巻: 人間と社会のつながりをとらえる〈対人関係・価値論〉』, サイエンス社
- 澤田匡人, 2005, 「児童・生徒における妬み感情の構造と発達の变化—領域との関連および学年差・性差の検討—」, 『教育心理学研究』, 53, pp.185-195.
- 袖山恵理, 2008, 「放課後子ども教室における子どもの居場所づくり」, 川村学園女子大学文学部心理学科卒業論文

謝辞

本調査は, 科学研究費 (萌芽研究) と本学教育奨励研究費の助成を得ました。また, 調査の実施にあたりましては, 我孫子市教育委員会・我孫子市子ども福祉部・我孫子市第一小学校のご理解ならびに第一小学校学童保育保護者・あびっ子サポーターのご協力を賜りました。各位のご協力に, 筆者一同こころから感謝申し上げます。